

大正末期の無産階級新聞論争をめぐって

—日本ジャーナリズム論史ノート（I）—

山 本 明

I

日本における新聞学の発足は、一八九九年の松本君平著『新聞学』の刊行におくのが通説である。この本は、副題が「欧米新聞事業」となっていることから分るように、欧米、主としてアメリカの新聞事業を紹介し、その活動を詳述したものであった。つまり、本書は新聞記者志望者にたいする実用的入門書であり、著者も「新聞学に序す」の末尾に「此書……若し世の青年志を抱き新聞経営に従事せんと欲するものの為めに、一助たることを得は幸也」と書きつけている。

このような実用書をもって、日本における新聞学成立のメルクマールにすることについては、いささか疑問をいだく人もいるにちがいない。だがその議論はさしおくとして、この種の実用的新聞「学」が、その後約三〇年つづくのである。⁽¹⁾一九一五年に刊行された杉村広太郎『最近新聞紙学』、小野瀬不二人訳著『最新實際新聞学』、一九一六年の吉野作造編『新聞』を経て、一九一九年の若月一步『新聞を造る人記者になる人読む人の学』、一九二三年新聞研究所編『新聞学・研究講座速記録』にいたる系譜は、日本の新聞研究が実用学であったことをしめしている。⁽²⁾これらの本の著者はその全員が新聞記者もしくはその経験をもつ人たちであり、新聞の本質もしくは機能について科学的な批判を試みることなく、新聞を所与の

ものとして把握し、その取材・製作過程を詳述したものにすぎなかった。それは極言すれば、料理入門書、生花入門書のたぐいと本質的にはちがいが無いものといえよう。もちろん、このような新聞研究の未発達、日本の新聞産業そのものの後進性を背景としている。資本主義的産業として未確立な新聞事業に対応する「木鐸意識」と、先進欧米諸国の新聞事業を紹介してそれに追いつくことの必要性、これらが日本の新聞研究を規定し規制していた。

だが、一九二〇年代後半から、ようやく新聞研究も、新聞事業案内からジャーナリズム論へと発展し、ジャーナリズムの本質、イデオロギー性や社会的機能が、社会科学的視座をもつ研究の対象とされるようになる。このような新聞研究の進歩は、基本的には研究の土台としての新聞事業の産業化に照応するものであったが、より微視的には、以下に列挙するような諸条件によるものであった。

I ドイツ新聞学の輸入。アメリカ的实用新聞学にたいして、ドイツの新聞学は新聞・ニュースなどの概念規定から出発し、その上に理論を構築するというきわめて抽象性・構造性の高いものであった。この方法論の輸入によって、新聞ははじめてアカデミズムの中での研究対象になる資格を得ることができた。この系列は、小野秀雄によるパイオニア的研究や藤原勤治『新聞紙と社会文化の建設』（一九三三年刊）によって日本に紹介される。この系列の主流は、やがて一九二九年に設立された東大文学部新聞研究室に集約される。

II 日本における社会学の成立、とくに世論研究の導入。ドイツ新聞学の導入と前後して成立した文化社会学も新聞研究の発達に大きな刺激をあたえる。タルド『世論と群衆』の翻訳もこの文脈でとらえることができる。この系列は相互に影響をもち、かつマルクス主義とも関連して、一九三〇年代の戸坂潤、梯明秀のジャーナリズム論へと結びついてゆく。

III 新聞産業の巨大化・寡占化にともなう新聞批判の興隆。独占資本の成立、日本帝国主義の海外侵略の開始、国内における階級斗争の活潑化にともない、商業新聞は大衆化するとともに反権力的立場を放棄して、基本的には国家権力の側にた

つ民衆「教化」の役割をはたす。このような状況にたいして民衆の側からの新聞批判がさかんになり、それは特定の問題にたいする報道態度の個別的批判から、やがて商業新聞全体の姿勢を批判するようになる。この系列は、主として『改造』『解放』『我等』などの総合雑誌を舞台としており、その頂点には『中央公論』一九三一年七月号の特集「現代新聞論」がある。

IV マルクス主義運動の発展と無産階級日刊新聞論争。マルクス・レーニン主義において機関紙・誌は「宣伝・煽動・組織」の任務をはたす。日本においても、レーニン『何を為すべきか』が紹介され、かつ福本和夫が『マルクス主義』でこの課題を強調し、「階級的新聞」の刊行が重要な課題となる。他方、労働農民党の成立、過程およびその分裂の中で、「全無産者階級のための日刊新聞」発刊が計画され、どのような新聞を刊行すべきかについて論争がおこる。この論争は、たんに無産階級新聞の性格を論じるところにとどまらず、商業新聞のイデオロギー性、階級性、階級斗争における新聞の役割、民衆の日常的意識と階級意識との関係など、さまざまな分野に広がり、その後のジャーナリズム論にきわめて強い影響をあたえるものであった。

右にのべた四つの条件は、ドイツ新聞学の系列をのぞいて、他の三つは相互に関連しあいながら、ジャーナリズム論を形成するのに力となっていた。ドイツ新聞学の系列は後に東京帝大新聞研究室に凝集したこともわかるように、アカデミズムの色彩がこく、没イデオロギー的研究に終始したのにたいして、他の三系列はそれぞれ現存のジャーナリズムにたいする強い不満・批判から出発しており、それ故に、自己のイデオロギーをかくそうとせず、むしろその立場からジャーナリズムのイデオロギーとの対立原理を明かにしようとするものであった。

ところで、今日、ドイツ新聞学的立場の研究、アカデミズムの新聞学は、強い影響力を学界にもジャーナリズムの世界にも与えていない。それにたいして、イデオロギー的ジャーナリズム論は、「戦前の遺産」として今日、学ぶところが多いよ

うに思われる。たとえば、昭和初年代の戸坂潤、中井正一のジャーナリズム論・コミュニケーション論——ドイツ新聞学をのぞく系列の集積として一つの頂点をきざしたものとみることができ——は、きわめて高い水準に達し、今日においても大きな影響力をもっている。⁵⁾これらの「遺産」はアメリカ流のマス・コミュニケーション論に不在のイデオロギー性・批判性に立脚しており、それがマスコミ研究万能ともいえる現在でも高い評価をうける原因なのであるが、ともあれ、日本のジャーナリズム論の歴史について考えるとき、それらをさけて通ることは不可能なのである。

だが本稿では、戸坂・中井らのジャーナリズム論をあつかうのが目的ではない。むしろこれらの頂きを準備したものとして、大正末期から昭和初期にかけての、無産階級日刊新聞論争をとりあげる。それは、まず第一に、雑多ではあるが、イデオロギー的ジャーナリズム論の原型を提出しているからであり、第二には、この論争が、日本のジャーナリズム論を「実用学」の次元から、科学の次元へ上昇させる重要な契機を提出したからである。

(1) 明治・大正の新聞について、まだ全面的な研究は行なわれていない。この期の日本の新聞研究に外国のジャーナリズム研究があたえた影響とその受容の仕方については、和田洋一「明治・大正期の新聞学——その後進国的姿勢について」(『日本社会と近代化』慶応通信刊・一九六七年)参照。

(2) 日本新聞学文献目録は完全なものがないところない。ただし、朝日新聞大阪本社調査部『藤原恵文庫』目録(一九四五年)は、発行年順に主要文献が記されていて、不完全とはいえ新聞学史の展望には便利である。

(3) 吉野作造編『新聞』の著者は不明であるが、蘇峰の序文によれば、「内外の新聞事業に従事し、今なお従事しつつあるの人」である。

(4) 大正末期のジャーナリズム論としては、次のものが重要である。長谷川如是閑「ジャーナリズムの社会性」(『我等』一九二二年三月号所収)、田中王堂「文明史家としてわが国のジャーナリズムの特徴と傾向とを考察す」(『中央公論』一九二五年九月号所収)、浅野利三郎「新聞紙発達論」(『日本及日本人』一九二五年秋季増刊「現代新聞雑誌批判号」所収)、長谷川万治郎「社会的意識状態としての新聞紙」(『前掲書』所収)。

(5) たとえば鶴見俊輔「戦後からの評価」(中井正一『美と集団の論理』一九六二年刊所収)、藤竹暁「現代マス・コミュニケーションの理論」一九六八年刊、参照。

無産階級の日刊新聞の必要性が主張されたのは、一九二六年、全労働団体、農民組合、社会主義団体、そして急進的インテリをとらえた無産政党結成の動きの中であつた。単一無産政党の樹立はこれらの団体・個人の悲願でもあつた。

無産階級の日刊新聞発刊論は、この単一無産政党の樹立と実践的にも理論的にも密接な関係をもっている。それは第一に単一無産政党に結集した人びとがその影響を全無産階級に属するすべての人びとにおよぼそうとしたという運動論的視点からの要求である。第二は、単一無産政党の思想的・理論的背景であつた山川均の共同戦線党論・単一無産政党論が日刊新聞論にあたえた影響である。つまり、この日刊新聞論争はその出現の契機として山川イズムの母斑をおされているのであり、それはのちに福本イズムの出現によって否定されるのである。

この問題を論じるにあつて、小稿では、この期の社会主義運動について多くの頁をとることは許されないが、さしあたり必要な山川イズムと労働党結党との関係について必要最少限の叙述をしなければならぬ。

山川のこの期の革命戦術は、ブルジョワ民主主義の獲得であり、当面の目標は、「既に獲得せられた或る程度の政治的自由と民主化とを挟んで、絶えず之を奪還し、又は単なる形式に過ぎないものに変えようとする闘い」、すなわち政治的自由の獲得であつた。だが、「小ブルジョワ急進主義は民主主義を要求するが、他方でブルジョワジーと無産階級とはさまれて不安定であり、反動勢力の指導下におかれて、無産階級に敵対する危険性をもっている」から、「無産階級の大衆を、小ブルジョワ民主主義の指導に引き渡す」ことは拒否しなければならぬ。そこで「全無産階級を、能う限りの最大限度に於いて『そっくり其儘』、独立した無産階級の政治勢力に結集する」必要が生じる。この政治的結集が「単一無産政党」なのである。すなわち、この政党は、戦術目標⇨社会主義革命をめざすのではなく、戦術目標⇨ブルジョワ民主主義獲得のためのものであ

り、彼自身の言葉をかりるならば、「無産階級の革命的要求を最大限に言い現わし、新社会の実現に必要な施設と政策とを掲げることを第一義としたものではなくて、無産階級の有ゆる要素の、当面の利害と要求とを、最大限に代表」（傍点引用者）した合法政党であり、「反動的・帝國主義的政治勢力との闘争という、限定された目標のもとに、最終目的と根本原理とを異にする要素をも、一つの反ブルジョワ的政治勢力に結合するという意味で、共同戦線の特異な一形態」にすぎないものであった。

こうした提唱は、普通選挙実施を目前にひかえて、一九二六年三月に労働党の成立として実現した。ただし、右派＝総同盟は反共路線の立場から共産系と目せられる者の排除を主張し、準備会は「共産主義的色彩ある者は絶対に入党を拒絶すること」という申し合わせを採択、ここに単一政党は左派不在の「単一」政党として発足したのである。だが、このような右派の政策にたいして、排除された日本労働組合評議会・無産青年同盟・水平社などの左翼団体は労働党門戸開放を強く要求し、ついに十月二十四日、労働党第四回中央執行委員会で右派は脱退、労働党は評議会を中心とする左翼の大衆政党として再発足するにいたる。

ここでわれわれが新聞論とのかかわりで問題にするのは、単一無産政党が、無産階級の「当面の利害と要求」によって成立するという考えである。ここには反ブルジョワという一点で全無産階級が統一し得るという考えがある。

こうした無産政党論は、山川の好むと好まざるとにかかわらず、そのまま無産階級新聞論を作りあげていった。つまり、無産階級の共同利害の立場から新聞発行が可能であるとする考えである。これは、やがて抬頭する福本イズムの側から、痛烈な批判をうけることになるのだが、それは後述するとして、さしあたりジャーナリズム論にあたってみよう。

この期に発表された無産階級新聞論は、つぎの四稿に代表される。³⁾

早坂二郎「社会組織と新聞雑誌」『社会問題講座』新潮社刊第一卷（一九二六年二月刊）、第二卷（一九二六年四月刊）、第四卷（一

九二六年五月刊)に分載)

青野季吉「無産階級の新聞について」『解放』一九二六年七月号所収)

北条一雄(福本和夫)「全無産階級のための新聞」『マルクス主義』一九二六年八月号所収。のち北条一雄『理論闘争』(一九二七年二月、白揚社刊)に収録)

門屋博「プロレタリア新聞論」(河上肇・大山郁夫監修・政治批判社編『マルクス主義講座』第一巻、一九二七年十一月刊所収)

まず、もっとも早く発表されたのは、フェビアン協会早坂二郎⁽²⁾の論文であった。この論文の特徴は二点ある。(I)「ブルジョワ新聞」の暴露・批判に力点がおかれているが、その所説は、アプトン・シンクレヤ「真鍮の貞操切符」(Upon Sinclair: The Brass Check, A Study of American Journalism. Pasadena 1920.)に全くとらってはいないほど依存していること。(II)単一無産政党論の一分枝としての「単一無産新聞論」を主張していること、である。

第一の点については、シンクレヤの名著「真鍮の貞操切符」に依拠しているだけに、量質ともに他の論稿を圧している。また論文末尾の参考文献表には、アメリカ、イギリス、ドイツの新聞研究書や日本の文献が多数あがっており、早坂の「新聞学」の素養はかなり高度であったことが想像できる。第二点については後述するとして、早坂の論文の紹介にうつらう。早坂はまず商業新聞の資本主義化を次のように指摘する。

「大新聞は現代に呼吸しようとする限り、たとえ利潤搾取以外の他の目的、例えば主義主張の宣伝、教化等を目的とするものであっても、資本主義社会に於ける一大企業である当然の結果として大資本を必要とし、新聞は資本の出資者に支配されなければならない。そして資本の出資者こそ即ち資本家である。此処に『新聞紙の資本主義化』の不可避的素因があり、現代の大新聞は其の資本家擁護の態度が露骨であるか、婉曲であるか、又は無産階級圧迫の言論が明確であるか、曖

味であるかを問はず、極く僅少の例外を除いては全部が『資本家新聞』と呼ばれ得る」。

早坂は新聞が一大企業であることから、まず商業新聞||資本家新聞と定義づけを行ない、そこから「取材の統制」がなされる結果、「報道の水路であった新聞も或る種のニュースに対しては忽ちコンクリートの壁になってしまふ」。そのような「取材の統制」をもたらす「資本主義的意識」は、「資本による新聞の所有形式」によってつくられるという。早坂の指摘する所有形式とは「新聞の存在其物を支配する内面的、実質的の所有形式」のことで、それには四種あるという。すなわち、I直接の所有、II新聞所有者の所有(新聞トラスト、政党の新聞支配、財閥による新聞支配など)、III広告および補助金による所有、IV直接贈賄。その結果、「労働者の眼から見た近代新聞は、一個の広大なる兵器廠である。そこでは、有産階級の人びとが敵を屠る魂の爆弾やガス弾を製造している。階級闘争は新聞社を中心にして演ぜられるようになるのだ」。

こうして「今日に於て資本家新聞より事の真相を聴かんとする事は何人にも明かである通り絶対不可能事である」という結論に達した早坂は、絶叫する。「無産労働階級は先ず第一に新聞の爆弾を用意しなければならぬ。而してその爆弾は敵戦線の頭上に破裂さするよりも、正攻法によって『真実、ただ真実、而して真実以外の何ものでない』報道のみを伝え、敵壘直下の地中より土砂と共に一切の資本主義組織を天に向つて飛散せしめよ」。

では、どのような「新聞の爆弾」が必要か。彼はイギリス労働党の『デイリー・ヘラルド』を念頭におきながら、次のような提案をしている。

「私の考えるところでは、無産階級新聞が先づ第一に決定しなければならぬ原則は一紙購読主義、即ち無産階級新聞以外に他の資本家新聞を購読しなくても十分に購読慾を満足せしめ得る新聞を製作すると云う方針である。これは現代の無産階級大多數の購買力と密接な関係を有することは勿論であるが、更に其の文化の実状をも十分考え、従来の慣習をも斟酌したる結論である。

……さて一紙主義の原則を採用するとなれば、当然色々な条件が必要となってくる。これは概言すれば、無産階級新聞も資本家新聞に見劣りしてはならぬと云うことである。……今日まで現われた十数種の日本無産階級新聞のいづれもが、その大きさ、内容に於て（一般読者の立場から観ての）著しく資本家新聞に見劣りしていたことは争われぬ事実で、所謂近代的大新聞は一つもなかったのである」。

こうした「近代的大新聞」の様相をもった無産階級新聞は、その内容においても特色をもたねばならぬ。すなわち——「資本家新聞は、その豊富なる資力と広告収入と通信網によって、一般大衆の喜ぶところを比較的万遍なく与えている。単に興味中心なる言葉によって侮蔑することの出来ぬ用意があり、大衆生活の實際に深く喰込んでゐる。然るに日本従來の無産階級新聞の行き方を見るに、徒らに異色ある主張に急にして全紙面が血走っている。そこには理論と闘争と一部無産特権階級の関心事のみが無味乾燥に羅列してある。つまり大衆の生活にピッタリとしない緊張のみが一切の調子の基調となつて、争議の報告書の如き観を呈している。これでは新聞は決して大衆化することが出来ない。新聞が大衆化することが出来ない」と云うことは、第一に大読者を包容し得ぬ結果を招来し、従つて新聞の目的である主張の宣伝が實際に殆ど不可能になることを意味する。苟くも一個の商品として市場に売出す以上、無産階級新聞とてもはや単なる同人雑誌ではない。算盤がとれると云うことが、極めて重要な要件となつて来ることは言ふまでもない。徒らに潔癖に墮して自ら高しと夢想する小児病が新聞に侵入した時、それは好んで大衆より離反して自ら縊るものか、自ら慰むる自演行為と知るべきである。

此の意味に於て講談可なり、小説可なり、或は大衆芸術としての映画欄よろし、碁・将棋よろし、苟くも資本家新聞に於て撰取され得る一切の興味本位的記事は其の儘無産階級新聞の紙面に移さるべきである。無産階級新聞が資本家新聞と異なるべき所は決して斯う云う種類の内容に於てではなく、その一切の根柢をなす階級意識に於てでなければならぬ。全

紙面の奥に澎湃する全無産階級解放の精神に於てでなければならぬと信ずるのである」

早川の念頭にあるのは、無産階級のための大衆の近代新聞である。そこでは、とくにだれによって指導されるのかという問題意識もないし、組織とのかかわりあいも全く考慮されていない。つまり、非組織大衆にたいして「階級意識」を注入することが目的なのである。

早坂論文は、日本のジャーナリズム論史にとつては劃期的意味をもっている。この論文以前に、新聞の階級性・イデオロギー性を論じたものはみあたらない。もちろん社会主義運動・労働運動の中で商業新聞の報道に疑問ないし批判をもった者は数多くあったにちがいない。だが早坂のようにそれを体系化したのべたものはいなかったのである。しかも彼は商業新聞批判の中から無産階級新聞論を展開しているのである。彼の商業新聞批判がシンクレアによっていることは先にのべたが、この批判部分とイギリス労働党のデイリー・ヘラルドを参考にした無産階級新聞論とを結合して、一つの体系にまとめた点は、シンクレアをこえていると言ひ得よう。これ以後の新聞批判はすべて、言及するしないはともかく、早坂のこの論文を出発点としていたことは、この論文が長期間もつていた影響力を証明するものであった。ふつう早坂はシンクレアの紹介者として記憶されている。だがジャーナリズム論史のうえでは、この論文の執筆者として再評価されるべきであろう。ともあれ、日本のジャーナリズム論は、早坂論文によって新しい段階に入ったのであった。それは、次に紹介する青野・北条などのプロレタリア・ジャーナリズム論を生みだすとともに、既存の実用学的ジャーナリズム論にショックをあたえ、太平の夢をやぶる役割をも果たしたのであった。

早坂論文とはほぼ同じ趣旨の論文を、翌二二六年に青野季吉⁽⁴⁾が発表した。題名は「無産階級の新聞について」。結論は早坂とは同様だが、ことなるところは、早坂とちがって青野は、読者として組織労働者と未組織労働者の二つの場合を想定し、主として後者についてのべている点である。結論は早川のものとは大きな違いはないが、そこへいたるプロセスの違いに重点を

おきながら紹介しよう。

まず青野は「日本の無産階級は今や日刊の新聞紙を持たなければならぬし、又持ち得る段階に進んでいる」という認識にたつて、次のようにのべている。

「無産階級の新聞が単に組織された労働者を目当にするならば大きな週刊紙や日刊紙の必要は必ずしもない。無産階級のうちの組織された部分には其の組織の中核から発行される報道機関が夫々存在し、其の属する組合なり団体なりの活動、更に組織された労働者一般の活動を知ることが出来るのである。無産階級新聞が文字通り無産階級のものである為には組織されない無産大衆を主として目当としなければならない。

組織労働者と未組織労働者と、其の何れを主たる読者の範囲にするかに依つて其の新聞の内容は格段の相違を生じ、ざつと考へて見ても、前者の場合には運動の報告の方面、理論戦術の研究の方面が其の内容の重大な部分になり、後者の場合には一般社会生活、政治生活の報道的、暴露的方面及び生活の愉快的方面が其の内容の大切な部分になるべきである。そして内容の作成に当つては確然たる区別と方針とがなければならぬ。

……無産階級としては無産者がブルジョアジーの新聞に釣られることを極力防止しなければならず、其の為には同じく大衆的の新聞を以て応戦する外はないし、又それにはブルジョアジーの新聞が持つ強味を或る程度まで無産階級新聞が持つてゆかなければならない。

組合の前衛乃至有力な組織労働者にとっては必ずしも興味がなく、生温く愉快的なことであっても一般組織労働者にとっては其が第一の索引力である場合が沢山ある。そんな心理は次第に抜き取つて、より闘争的にすることが必要であることは事実であるが、最初から其を無視してかかったのでは所詮其を抜き取ることすら出来ない。

大衆を引きつける為には大衆の心理——社会心理——を十分に把握しなければならぬ。特に新聞の場合に於ては其の

必要が甚だしく、此の準備がなくては『大衆的新聞』は標語倒れであつて、フラクションの機関に脱してしまふのである」。

青野論文は、早坂論文を読んだ後では、とくに目新しい点がないことは先にのべた。だがこの論文が青野によって書かれたということに私は興味をもつ。というのは、青野は一九二二年の第一次共産党に参加し、二四年の解党後も共産主義ビューローに属し、一九二五年一月、上海で開かれたコミンテルンとの党再建に関する会議に出席するなど、この論文が書かれる約一年前まで、共産主義グループの組織成員だったからである。さらに彼は早坂とちがつて、レーニンの新聞論を熟知していたという事実がある。彼はビューローからはなれた後も雑誌『マルクス主義』一九二五年十一月号に、「『何をなすべきか』について」と題する論文を発表、レーニンの新聞論を紹介しているのである。この論文がその年九月発刊された無産者新聞の方針確立のために書かれたことは、想像に難くない。

ところが、おかしなことに彼は前述したようにすでに同年五月頃ビューローをはなれているのであり、その脱退の理由の一つが、無産者新聞の編集方針をめぐる論争にあつたと考えられるのである。佐野学は予審訊問で次のようにのべている。「機関新聞ニ付テハ青野君ガ、事実ノ報道ヲ主トスル新聞ニシタイト云フ意見ヲ述ベマシタガ、会議ハ其意見ヲ採用シナイデ、『テーゼ』ニ掲ゲテアル様ニ煽動的新聞ニスル事ニ決定シマシタ」。こうして、ビューローとは政治的意見のちがいがから分離した青野が、無産者新聞に理論的援助をし、さらに翌一九二六年二月には、レーニン『何を為すべきか』の本邦初訳を白揚社からだしているのである。

こうした彼の行動について、いま立ち入って考察することはできない。ただ言えることは、青野が「無産階級の新聞について」を書いたときには、彼がレーニンの『イスクラ』発刊の事情や党機関紙の原則を熟知していたという事実である。

早坂・青野の無産階級新聞論が、なぜ未組織労働者を対象とした近代的大新聞を発行をかくも熱っぽく提唱しているの

か、その背景にはいくつかの理由があると考えられる。

I 無産階級が政治過程に登場するにさいし、その微力さに比して体制側マス・メディアの巨大さにたいする危機感・焦燥感。社会主義陣営が、小部数の理論雑誌によって戦術・戦術を議論している間に、体制側は、すべての大衆をくみこむマス・コミュニケーションのネット・ワークを作りあげてしまったのである。ここでは、それについて、いくつかの指標をあげるにとどめよう。まず新聞については、一九二四年大毎・朝日ともに一〇〇万部を突破、全国紙の全国征覇が実現したし、一九二二年『週刊朝日』『サンデー毎日』発足、前者の創刊号発行部数は三五万部であった。二三年菊池寛が『文芸春秋』をはじめ、講談社の『キング』は創刊号が一九二五年にでて、またたくうちに「百万部雑誌」とった。新しい媒体ラジオは一九二五年三月発足。

こうしたマス・コミュニケーション時代の幕開けにたいして、早坂・青野たちが無産階級のための日刊紙の発行を待望したことは、容易に想像できる。彼らの論理には、ブルジョワ大衆新聞に対抗するプロレタリア大衆新聞という図式がでてきたのは、さほど不思議ではない。

II 早坂・青野がともに長年「ブルジョワ」新聞記者であったという事実注目したい。彼らが長年の経験の中で、いかに「ブルジョア」新聞が虚偽意識の所産であるかと知ったと考へても無理はないだろう。そこから彼らの論文が「ブルジョワ」新聞の階級性の暴露に力点をおき、さらに青野は「事実ノ報道ヲ主トスル新聞」を計画し、早坂が「真実、ただ真実、而して真実以外の何ものでない」新聞を待望し、その実現によって、「新聞記者の使命は過去の汚辱と過労の世界より高翔して始めて輝かしい光を放つのである」とうたいあげたのであった。

III 山川イヅムの影響。彼らをもっぱら非組織労働者のための大衆新聞を論じたのは、日本のおくれた大衆の意識を上昇させることが急務であるという戦術上の配慮にも求めることができる。前衛党の結成が目標ではなく、あくまで大衆を敵にと

られないことが焦眉の急だという認識がそこにある。この考えは山川の「無産階級の方向転換」の線にそうものであった。山川は次のようにのべている。「吾々は資本主義の撤廃以下の如何なる改善も、決して吾々を解放せぬことを知っている。けれども若し無産階級の大衆が資本主義の撤廃を要求しないで、現に目前の生活の改善を要求して居るならば、吾々の当面の運動は、この大衆の現実の要求を基礎としなければならぬ。」

右の文章は、そのまま早坂・青野の新聞論の哲学であつたらう。山川の単一無産政党論は、そのまま新聞論に読みかえでさる。次の文章の原文は山川のものでカッコの中は、私の読みかえである。

「無産階級党〔無産階級新聞〕の終極の任務は、ブルジョワジーに変わって、無産階級〔無産階級新聞〕をして政治権力〔全新聞読者〕を把握せしめることである。けれども無産階級党〔無産階級新聞〕がこの任務を全うするための当面の任務は、無産階級の政治勢力〔読者〕が、ブルジョワと小ブルジョワの政治勢力〔新聞〕のうちに分解し、離散し、同化せられることを防止することである。このために、全無産階級を能うかぎりの最大限度において、そっくりそのまま独立した無産階級の政治勢力〔新聞〕に結束することが必要である」。

このような見解を裏づけるものとして、一九二六年九月に青野が『文芸戦線』に掲載した「目的意識論」、二七年一月の「自然成長と目的意識再論」がある。この論文は、プロレタリア文学運動の「方向転換」を主張したもので、青野は次のようにのべている。「プロレタリア文学運動は飽くまでも、目的を自覚したプロレタリア芸術家が、即ち社会主義プロレタリア芸術家が、自然成長的なプロレタリアの芸術家を、目的意識にまで、社会主義意識にまで、引上げる集団的活動である。そこに運動の意義があり、そこに運動の必然がある」。この論文にたいして、福本イストから強い反論がなされた。彼らは青野が「徒らに芸術の野に固執して自己陶醉に陥」（谷一「我国プロレタリア文学運動の発展」）っていると非難し、「芸術の役割は其の特殊な感動的性質に依って、政治的暴露に依って組織されて行く大衆への進軍ラップとなることであり、決定的行

為への鼓舞者となることであり、換言すれば、大衆を組織する為の契機たる政治的暴露を助ける所の副次的な意義を持つものに過ぎない」(鹿地亘「所謂社会主義文芸を克服せよ」と文学Ⅱ進軍ラッパ論を強調したのであった。

この論争は、そのまま青野の新聞論と後述する福本の批判にあてはまる。青野の「無産階級新聞」が、新聞を通じての「目的意識の注入」を目的とし、広汎な無産大衆を相手として、自然発生的なプロレタリア意識を社会主義的意識にまで高めようというのにたいして、福本イストはもっぱら「政治的闘争」と「政治的暴露」によってしかそのような目的は達せられないのである。青野の主張は山川の「方向転換論」の文芸版であるというのが平野謙の主張だが、その意味で青野の無産階級新聞論は、「方向転換論」の新聞版だったといえるのである。

こうしてみると、早坂・青野の「目的意識論」は、社会主義運動における山川路線と平行して提唱されたことがよく分る。したがって、山川イズムの退潮と福本イズムの興隆は、そのまま早坂・青野の新聞論の退潮となってしまった。そのために、ここで提出された諸問題について、きめ細かい検討はついになされなかったのである。

(1) 山川均『無産階級の政治運動』二二四ページ。

(2) これらの新聞論については、官憲側からも論じられている。「我が邦の出版物に現れたる無産階級新聞論について」(内務省警保局『出版警察報』第一五号(一九二九年十二月)、第一六号(一九三〇年一月))所収。

(3) 早坂二郎(一八九七—一九四四)宮城県出身。東北学院中学部・二高を経て東大法学部政治学科で吉野作造に師事。東大YMCAおよび新人会に所属し社会運動に従事する。この間、吉野作造『普通選挙論』を分担執筆。一九二〇年『大学評論』編集委員として木村久一事件に連座、検挙される。卒業後東京朝日新聞入社、外報部所属。一九二一年十月、白蓮・宮崎龍介事件をスクープ。のち思想的問題で朝日を退社。東京毎夕新聞記者となる。かたわら一九二六年安部磯雄・宮崎龍介と独立労働協会を組織、一九三三年毎夕新聞外信部長。交通事故で両足切断。一九四三年、反戦言辞をろうしたと検挙さる。一九四三年歿。

なお、早坂二郎の経歴については、住谷悦治氏からの教示をえたが、下記の文献にもその片鱗がうかがえる。解放運動犠牲者合葬追悼会世話人会編『解放のいしずえ』(同会刊・一九五六年)、原田謙二「赤銅御殿の白蓮脱走」(『文芸春秋臨時増刊・三代特ダネ読本』一九五五年十月刊)、太田雅夫「星島二郎と『大学評論』」(『キリスト教社会問題研究』第一号一九六七年刊)。

(4) 青野季吉(一八九〇—一九六一) 有名な人なので経歴は略すが、本稿との関連部分だけ記そう。一九一五年早稲田大学英文学科卒業後読売新聞入社、一九一九年大阪日日新聞に勤務、ついで国際通信社に勤務。その頃第一次日本共産党入党、一九二五年一月ビューローの一員として上海会議に出席したが、やがて脱退。のち『文芸戦線』による評論家として活躍した。

III

早坂・青野は、未組織大衆へ「階級意識を注入」するための大衆新聞について熱っぽく語った。だが朝日新聞の資本金すでに百万円という時代に、「資本家新聞と同等或はより以上の」(早坂)内容・発行部数および安い価格をのぞんでも、それは夢に近かった。そして兩人とも、実現の契機については全く語っていないのである。

だが、早坂・青野にたいする反論は、こうした実現可能性をめぐって提出されたものではなかった。それよりもむしろ、よりイデオロギー的観点からなされたことは、きわめて興味ある。すなわち、早坂・青野の主張が階級性を欠いているという批判がそれである。これは主として共産主義グループの側からなされたのであった。

ここで、この批判を紹介する前に、当時の日本共産党について簡単にふれておかねばならない。一九二二年七月、日本共産党は創立されたが、二三年六月大選挙にあい、翌二四年三月「共産党は日本においては時期尚早」という理由で解党を決議した。あとは残務整理委員会がのこされているだけであった。だが一九二五年一月、コミンテルン代表と日本共産党員とのいわゆる上海会議が開かれ、ただちに結党を準備する共産主義ビューローが組織された。このとき、二十二年結党以来の党員であった青野季吉はビューローをはなれ、いご共産党との関係を絶つのである。

上海会議によって、ビューローが結党にむけて活動を開始した頃から、山川均の影響がうすれ、いわゆる福本イズムが抬頭するのである。

ビューローの任務は、(Ⅰ)党結成のための前衛の結集と、(Ⅱ)そのための新聞の発行、(Ⅲ)労農運動の指導、であった。解党を否定して再結党への方向を打ち出した上海会議では、機関紙の発行がきわめて重視されている。いわゆる「上海会議一月テーゼ」は、解党主義を痛烈に批判し、再建の方向をうちだしているが、その中でも次のように書かれていた。「……吾人は日本に於ける指導的同志が合法的プレスと共に一つの非合法プレスを設立することなく此の方法によりて大衆を教育するに努力することなかつた事実を以て……一大誤謬と認める」この一月テーゼにもとづいてビューローで作製された「組織テーゼ」では、その任務として「機関紙無産者新聞を発行する事」があげられている。このことはさらに、「一九二五年上海会議五月テーゼ(所謂ヘラー・テーゼ)」でより詳細にのべられている。ここでは、のちに刊行される無産者新聞の性格が規定されているので、左に引用しよう。

「従来の我々のプロ・アジは一定の方針を有していたとは言い得ない。機関紙、小冊子、小集会、大衆的集会等に於ける我々の在来のプロ・アジは、階級闘争理論に立脚するには相違なかつたが、一定の系統の方針がなく、且つ理論を完全に實際と結合せしめなかつた。ストライキ等に際しての大衆集會に於ては、感情抽象的に資本家階級を罵倒するのみであつた。左翼運動が急激に勃興し來りたる今日、プロ・アジを最も系統的に行うことが欠くべからざる要求となつた。……我々のプロ・アジの仕事の最も根本的な武器の一つは云うまでもなく労働組合新聞である。……週刊新聞——之れは廣大なる大衆に対するものである。これは宣伝及び煽動について第一義的の機關である。この新聞に於ては日本の労働者及び農民を興味づけ動かし得るところの現実的實際的問題のみを、誰れにも判る鮮明な言葉を用い、短文章のうちに取扱わねばならない。抽象的な概念と愚劣なる学者先生流とは、之れを絶対に禁すべきである。此の新聞は労働大衆の理解力と感情とに簡潔且つ鮮明に訴ふるものでなければならぬ。……週刊新聞は廣大なる大衆に付けられた宣伝及び煽動の機關である」このような方針の下に、一九二五年九月二〇日、無産者新聞創刊号が発行された。部数二万五、〇〇〇部。この部数は当

時としては驚異的な数字であった。創刊前に長老堺利彦は数千部でいいと主張していたし、徳田球一がいうように、「従来ノ経験ニヨルト、吾々ノ手ニヨリテハ三千以上定期的出版物ヲ出シタ事ガアリマセヌ」のである。こうしたデータからみると、無産者新聞は、日本のプロレタリア・ジャーナリズムにおいては、画期的な大衆むけ新聞だったことが分る。無産者新聞社のスローガンは次の三点であった。「I 全国無産階級の政治新聞たらんことを期す。II 大衆の日常斗争の武器たらんことを期す。III 無産階級前衛の結合促進の任務の遂行を期す」。このスローガンは、早坂・青野の無産階級新聞論とは決定的に対立するものであった。それはまず「政治新聞」と自らを規定することで、「近代的大衆新聞」とは本質的にことなっており、さらに「日常斗争の武器」ということによって、たんに「大衆の意識」を静的にとらえるのではなく、「闘争」の過程での意識を対象としていて決定的なちがいをみせている。また「前衛の結合促進」は、ビューローの役割をあきらかにするものであった。このスローガンについて、さしあたり「発刊の辞」における解説をみよう。

「(前略) 無産階級も、新聞を持たねばならない! このことは実に長い間の一致した希望であり、日本の無産階級の一大必要であった。今や無産階級の政治的覚醒が増大し、日本のプロレタリアの一大陣地たる無産者政党が出来あがるうとしている。この時に際し、全国的無産者新聞の必要は正に痛切である。わが『無産者新聞』はこの階級的輿論、その全国的必要に応じて生れたものである。我々は過去の社会主義新聞の因襲的な編集方針を排し、真に大衆のために戦う大衆の新聞としての新しい型を創造し、以て無産階級新聞の歴史的使命の遂行を期する。

……我『無産者新聞』は大衆の新聞であることを期する。本紙は無産階級陣営内の一党一派の所有物でなく、無産階級の物であり、日本の無産階級大衆の現実生活に立脚した階級的要求を表現し、そのために戦うものである。この故に我々は広く紙面を労働大衆諸君に解放する。大衆の間から大衆の要求を直接に表現した投書を募集し、これによりて大衆の生々とした意志を知る方法もとるのである。更に各種の大衆団体内や各地方にレポーター(報道者)を設置し、このレポ-

ター網の活動によって、常に無産階級の重要な、生きいきとした出来事を集め、階級闘争の全国的統一に役立ちたいつもりである」⁽⁶⁾。

この無産者新聞創刊の辞には、上海会議における党機関紙規定と当時の「単一無産階級新聞」の気分が無媒介に同居している。「真の大衆のために戦ふ大衆の新聞」という表現や、「本紙は無産階級陣営内の一党一派の所有物でなく、無産階級の物であり」という個所は後者のおいが強い。こうした「大衆の新聞」という自己規定は、たんに合法性を獲得するための手段ではなく、初期にはその基本的方針でもあったかのようである。たとえば、創立当初の社員は、主筆佐野学の下に、徳田球一、北浦千太郎、是枝恭二、井之口政雄、田所輝明、後藤寿夫、荒畑勝三、渡辺政之輔および産業労働調査所員などであったが、このうち、ビューロー員は佐野、徳田、荒畑、北浦、渡辺にすぎなかったし、編集会議も編集局員のほか左翼大衆団体のメンバーを加えているのである。⁽⁸⁾

この新聞の論説は、もちろんビューローの方針を広く伝えるものであったが、ビューロー機関紙としての自らを陰蔽することに懸命でもあった。たとえば、一九二六年二月二〇日第一六号の論説「大衆言論機関の立場を闡明す―無産者新聞は労働者農民自身のものである」⁽⁷⁾は次のようにのべている。

「創刊以来、本紙に対して卑劣なる流言を放ったものがあつた。それは本紙を出て『左翼派の機関紙』『社会主義の新聞』甚だしきに至つては『共産党の機関紙』といふが如き悪辣なものであつた。かくの如き流言は、無産階級の分裂を何より冀うブルジョアの利益と完全に一致するものであり、近時流行の分裂政策の一つの現れである。しかし本紙のこれまでの実質的發展は、既にこれらの流言の大部分を撲滅した。我々は読者諸君がかかる卑劣な流言と敢然戦ふことを希う」⁽⁹⁾

ここでは、上海テーゼによって課せられた自己規定に党機関紙を「卑劣な流言」として強く否定している。こうした混乱があつたにもかかわらず、無産者新聞社は、その支局設置と読者会組織を通じて、左翼の組織を広げていった。もちろん当

初は各団体へ郵送するという方法をとったため、「支局は組合の支部とゴッチャで独立した組織を持たず、紙代も組合の方で費(10)うてしまう」状況だったが、じよじよに組織を確立した。この組織が、一九二六年から七年にかけての共産党大衆化の地盤になったことはいうまでもない。この当時、日本にはレーニン主義新聞論の古典『何から始めるべきか』『何を為すべきか』が充分紹介されていなかったにもかかわらず、「宣伝・煽動・組織」を機関紙の原則としたことは、コミンテルン極東部からの示唆・教示があったとしても、注目してよい事実である。

無産者新聞は順調に発展した。発行部数は変らなかつたが、支局の確立によって配布網はととのい、一九二六年には週刊となつた。その影響力も、評議会・労農党の中では大きかつた。二六年の一週年記念には宣伝隊が街頭、工場、農村にくりだし、ビラ、ポスターはもちろん、宣伝マツチまでくばつて読者獲得運動にのりだした。

前述の早坂・青野論文は、こうした時期に発表されたのである。それはビューローの側からすれば、無産者新聞を無視もしくは悪意でみていると考へたことも想像に難くない。大衆新聞としての無産者新聞を応援しないで、なぜ未組織労働者のための新聞発刊を提唱するのか、ここに、早坂・青野への、無産者新聞もしくは、ビューローの怒りがあつたのだろう。とくに、ビューローから脱落した背教者青野にたいする憎悪がなかつたともいえない。

この頃、社会主義運動は、山川イズムから脱皮して、福本イズムが風靡しはじめていた。前衛党への結集ということが、福本イズムの名の下に、強くさげばれていた。福本は「労働者階級に真実の全無産階級政治意識をば現実にもたらす」ものとして共産党の必要性を主張し、「折衷主義者」山川均をすどく批判した。二十七年夏、福本は「左翼的方向は発展して、かの折衷主義から、真実の全無産階級政治行動意識にまで成熟しつつある」と、党結成が目前にせまっていることを訴へた。こうした立場にたつて福本は無産者新聞について論じているのである。

この時期に書かれた福本和夫「全無産階級のための新聞」は、副題に「併せて青野氏の無産階級新聞論を駁す」とあるよ

うに、青野にたいする攻撃であるとともに、無産者新聞の党機関紙化の理論的根拠をのべたものであった。⁽¹⁾ 福本は「日刊の全国的政治新聞」の必要性を次のようにのべる。

「我々は……ここには、所謂理論闘争に政治的暴露を重ね始めなければならぬ。凡ての階級から発散する政治的反抗を、全無産階級の意識の見地から、抽出、批判、促進、糾合しなければならぬ。この新なる闘争様式がここにまた新なる闘争手段を規定する。我々はかくして今や、かかる政治的暴露を最も完全に遂行しうるがための手段として、日刊の全国的政治新聞を持たねばならぬ。全国的、政治的、全無産階級の、であることを要する。従って、それは、単に、組合機関紙の綜合たるが如きものであつてはならない。」(傍点は原文)

ここで福本のいう「新なる闘争様式」とは前衛党による闘争の指導を意味し、「全国的政治新聞」とは前衛党の党機関紙を意味している。では、彼によって無産者新聞はどのように評価されるのか。彼によれば、無産者新聞は「全国無産階級前衛の結合促進の任務の遂行」というスローガンをかかっているにもかかわらずその任務は充分実践されていない。すなわち「それは、今日迄なお我々が我々自身のうちにも残存せしめていた所の組合主義の本質の故に、真実に全無産階級的な政治意識の見地からする政治的暴露の機関たりえずして、事実上は、単に組合機関紙の綜合と相距る未だ遠からざるものであつた。所謂理論的闘争の發展によって、だが、それは今や、——(極く最近時にいたり)——質的転向——『組合機関紙の綜合』から『全無産階級の政治意識の見地からする政治的暴露の機関』への——を遂げ始めつつある。我々はこの転向の開始を明白に看取しうるとおもふ。」

こうした立場、すなわち無産者新聞が党機関紙へと「転向」をとげつつあるという立場から、福本は青野を「俗学主義的調和論」とレッテルをはる。すなわち青野が「左右両翼の何れもが、労働農民党を全力をあげて支持すると宣言しているが、それが言葉通りに解されるとすれば、何故に左右両翼は各々自己のために新聞を持つために努力するに先立って、労働

農民党をしてその最も必要とする新聞を持たしめることに努力しないのであろうか」とのべたのにたいして、次のように答えている。

「よし、労働農民党が近くこの計画——其の全国的政治新聞による政治的暴露——を開始するとするも——（其の開始は党にとって緊急の任務であるが）——その政治的暴露には所詮一定の狭隘なる限界が課せられてあるであろう。これ此の党の本質の然らしむる必然の結果であると共に、しかもなお、党のかかる仕事は十分なる存在理由を持つのである。我々は先づ正確にこの確認の上に立脚しなければならぬ。」

つまり、福本にとっては大衆政党である労働農民党が新聞を発行しても、それは前衛党でないために「一定の狭隘なる限界」が不可避免なのである。したがって、福本は青野を、「客観的情勢の正確なる分析を試みようとするものでなくて、俗学主義的、空想主義的『希望』表白者」と断罪し、次のようにいう。「我々は既に暗示しおきたる如く、……我々の新聞（無産者新聞を指す—山本）をより発展せしむることによってのみ——ここに新なる質的転向をとぐることによってのみ——むしろ、はじめて、労働農民党をして、其の本質的使命を果さしむべく現実積極的なる支持を与へうるの条件を充しうるにいたるのだから」。

つぎに福本は、青野の「希望」する大衆新聞の内容について、批判する。

「氏によれば、氏の所謂『大衆的の新聞』の『内容の大切な部分』を形成すべきは、『一般社会生活、政治生活の報道的、暴露的方面及び生活の愉乐的方面』だというのだが、その所謂、政治生活の暴露的方面というのが、氏の立脚地並に理論の道行によれば、必然的に、我々の所謂『政治的暴露』の如き意義を有するものではあり得ないのであるから、従って『内容の大切な部分』とは、結局『一般社会生活の報道的、暴露的方面、及び生活の愉乐的方面』に約元されざるを得ない。」

福本の論文の大部分は、青野論文の引用である。福本（およびその同志）にとって、青野の主張は根本から間違っている。

なぜなら青野は前衛党およびその機関紙の存在を無視して論をたてているのだから。そこで、福本にとっては、まず前衛党の必要性を冒頭で主張しておけば、あとは青野論文の一句一句を批判することは不必要なのである。なぜなら青野は出発点においてまちがっているのだから。こうして、福本による青野論文の引用は、もっぱら「俗学主義」の見本としてさらしものにされているにすぎないのである。そこで、これ以上福本論文にかかりあうことはやめて、福本の立場を、より系統的にのべた門屋博「プロレタリア新聞論」にうつろう。この論文は、福本と同じく「党機関紙論」として書かれている。だが、これが福本論文とことなるのは、I一九二六年二月の日本共産党再建後に書かれていること。IIレーニン『何を為すべきか』および『何から始めるべきか』の強い影響下に書かれていること、である。両論文とも、ロシア社会民主党の機関紙『イスクラ』発刊の理論的準備をしたもので、共産主義運動における新聞論の古典である。前者の本邦初訳は、一九二六年二月に青野季吉訳が白揚社から刊行され、後者は一九二七年二月原欣次訳が共生閣から出た。門尾はこれらの訳本によりつつ、この論文を書いている。

門屋論文の特徴の一つは、プロレタリア新聞をブルジョワ新聞との敵対関係でとらえていることである。彼は、「プロレタリア新聞に対する全被抑圧民衆の階級的支持を抜き去ったなら、プロレタリア新聞はブルジョワ新聞の敵たり得ないであろう。我々は、プロレタリア新聞を論ずるに際して、ブルジョワ新聞に対するプロレタリア新聞のかかる対立関係をも明確にする必要がある」とのべている。この主張は、早坂が「無産階級新聞」の出現によって、「新聞一元論の時代は去って、二元論の時代は將に開かれようとしている」とのべて、「資本家新聞」と「無産階級新聞」の並存性を説いたのとも全くことなっているし、また青野が「無産階級の新聞がかくも二つ（『無産者新聞』と『民衆新聞』——山本）生れて来たことは、何といっても運動の生長を示していることで、この二つの新聞が順当な発達をとげて、その約束通り、日刊になることの一日も早からんことを、実際心から望んでやまない」とのべたのとも異質の立場にたっている。彼にとっては、ブルジョワ新聞はもちろ

ん、社会民主主義者の新聞もプロレタリア新聞の闘争物、対立物なのである。

こうした立場にたつてまず門屋はブルジョワ民主主義的な新聞の自由を否定する。彼はレーニンの『新聞の自由について』(一九一七年九月十八日)を引用する。「……ブルジョワ社会に於ける新聞の自由とは、金持に対して組織的に、絶えず、毎日数百万部を売る邪悪の力を与える事であり、彼等に貧窮し、搾取され、抑圧された大衆を欺瞞する力を与える事なのである」。ここから彼は「ブルジョワ新聞」を全面的に否定して次のようにいう。

「……伝播力と透達力とを持ったブルジョワ新聞は、いまや『社会的公正』及『階級的的政治的中立』を標榜しつつ民衆の前に現はれる。而かも、講談、小説、スポーツ、碁、将棋その他万般に亘るブルジョワ的精神支配の美衣に装なわれて、民衆を誘惑する。而かも、その中に、被圧民衆の階級的反抗を眠り込ませようとする毒素と、階級支配の鋭い武器がかくされているのだ。我々は、現在の大ブルジョワ新聞が宣伝する『社会的公正』及『階級的的政治的中立』の本質を常に大衆に向つて暴露しなければならぬ。又、社交、娯楽等に依るブルジョワ新聞の誘惑から分離しなければならぬ。」

この主張は、早坂の「資本家新聞に於て撰取され得る一切の興味本位的記事は、その儘無産階級新聞の紙面に移さるべき」という主張と真つ向から対立する。そこで門屋は早坂論文を「小ブルジョア的新聞論」、であると規定し、「氏はプロレタリア新聞の大衆化を求むるに急にして、その結果、プロレタリア新聞の階級性を抹殺せんとするに至つてゐるのだ」と断罪したうえで次のようにのべる。

「我々は先ず、現在のブルジョア新聞の所謂『ジャーナリズム』に対する対立物として、無産階級的新聞としてのプロレタリア新聞を主張する。現在、興味中心のセンチメンタルな『ジャーナリズム』の大衆の中への侵入は、プロレタリア新聞に対してかかる内容を要求する無産者の自然発生的な小ブルジョアの要求すら発生せしめている。この故に、我々にとっては、かかる『ジャーナリズム』の影響を受けた新聞観よりの徹底的な分離、プロレタリア新聞の使命の認識が先ず

必要なのである。

我々は、ブルジョア新聞の如く、続き物の講談や映画欄に依って大衆を引き付ける事なしに、被抑圧民衆、あらゆる層の中に発現する専制的支配の暴挙を生々しい事実を以て暴露し、彼等の不平、不満、反抗を誘発、指導する事によりて、『大衆の生活とピットリ』（早坂）合致する事が出来、ブルジョア新聞以上に無産者大衆の中に滲透する事が出来るのである。又、かくする事がプロレタリア新聞の本質でなければならぬのである。

以上のように門屋は「続き物の講談や映画欄」を徹底的に拒否するのだが、このような欄は無産者新聞にもみられることは、きわめて興味ぶかい。講談・映画などの大衆文化をどのように評価するか、あるいは「利用」できるかという問題は、その後ナップ内での「芸術大衆化論争」として本格的に議論され、戦後は民科芸術部会での「浪花節論争」にひきつがれる。この系譜では、もっぱらこれらの大衆芸術の「形式」をどのように「利用」するかが争点となっているが、門屋論文では、「プロレタリア新聞」においては、このような「利用」も否定されるべきなのである。

次に門屋は、青野論文にもふれて、「この中間派的新聞論は、既に北条一雄氏に依って、……十分に批判せられ、克服されたる所のもの」として「北条」論文を全面的に引用しながら、次のように結論している。

「青野氏は、その折衷主義的、組合主義的意識の故に、プロレタリア新聞の政治的暴露を『未組織大衆の心理』の中に没入して仕舞ひ、更に、氏の眼界には『未組織労働者大衆』しか映っていないのである。氏の、かかるプロレタリア新聞と、我々の『人民の凡ての階級の中にゆき、凡ての階級の中から発散すべき政治的反抗を、抽出し、指導し、利用し、糾合』すべきための政治的暴露機関としての『全無産階級政治新聞』との間に、如何なる本質的な相違が存在する事であろうか」。

この相違として、門屋は、「プロレタリア新聞の『性質』をあげている。すなわち、「I政治的暴露者及び政治的指導者と

して、Ⅱ組織者として、Ⅲ全国的、全階級的たるものとして、Ⅳ更に、これ等の任務を充分に果し得るが為に、出来得る限り、日刊新聞としての「条件の具備」である。こうした新聞は、その内容だけではなく、形式も全くことなっていると云う。すなわち「ブルジョア新聞は、巨大なる資本主義的企業として存在している。……故に、ブルジョア新聞に於ては、資本家——経営者——労働者——商品（新聞）——市場（即ち購読者）の関係はあくまで資本主義的である」が、プロレタリア新聞はそうであつてはならないという。すなわち、

「プロレタリア新聞は、その編集、配布、購読、拡張、財政的維持等総てに於て、プロレタリア的共働の上に成立され、組織されたものでなければならぬ。故に、プロレタリア新聞はブルジョア新聞と同じ意味における資本主義的商品であつてはならないし、又、新聞の仕事に従事する者と購読者とは、ブルジョア新聞の如く分離されたものであつてはならない。プロレタリア新聞は、全プロレタリアートの階級的支持の上に存在し、且つ、その献身的共働に依つてのみ維持され、発展さるべきものである」。

ここで彼が強調しているのは、いわゆる「労働通信員」制度である。この通信員は、「良き地方的暴露者、煽動者」になることが期待されている。こうして、門屋によって、新聞論は組織論の一環にくみ入れられたのであつた。

この観点は、社会をブルジョワ的コミュニケーションの網の目とプロレタリア的コミュニケーションの網の目という二つの異質なものに分ける認識から出発している。この考えは、戦後にまでもちこされている。たとえば佐藤毅は「社会的コミュニケーション」を「体制的コミュニケーション」と「反体制的コミュニケーション」に二分する考えを提唱している。¹³⁾

ともあれ、門屋論文は、運動の上げ潮の時期において、強い説得力をもっていた。無産者新聞が絶対的小部数であつたとしても、相対的には他の無産階級新聞を圧している状態において、門屋論文は現実根ざした主張だったのである。こうした背景によって、いわゆる「社会民主主義的」無産階級新聞論は、門屋に反撃にでることなく、そのまま沈黙を余儀なく

されたのであった。

- (1) 『現代史資料・第一四卷社会主義運動1』四六ページ。
- (2) 『現代史資料・第一五卷社会主義運動2』三三ページ。
- (3) この機関紙発行についてコミンテルンの期待はきわめて大きく、これが『イスクラ』的役割をはたすことを期待していた。コミンテルン極東部長ヴォイチンスキーはビュロー再建のため一万円を日本側に支出したが、使者北原竜雄が相場で使消し、結局一九二五年七月佐野学は「支那共産党ノ幹部翟秋日君ノ手ヲ通シテロシア義勇艦隊ノ人カラ、機関新聞発行ノ資金トシテ日本貨三千元ヲ受取りマシタ」。(『現代史資料・第二〇巻社会主義運動7』二〇一頁)
- (4) 志賀義雄『日本革命運動の群像』三六六ページによる。
- (5) 「徳田球一予審問調書」(『前掲書』一一〇ページ)
- (6) 無産者新聞社編『無産者新聞論説集』(一九二八年刊)による。
- (7) 「佐野学予審問調書」による。『現代史資料・第二〇巻社会主義運動7』二一八―二一九ページ。
- (8) 無産者新聞が機関紙でありながら、大衆新聞と自称しているという混乱は、編集担当者が混成部隊であったことからみることができ。なお、一九二八年二月に創刊された中央機関紙『赤旗』の場合は、「赤旗ノ原稿ハ全部常任委員ガ担当シ、其会議ニオイテ論文ヲ読ミ上ゲ討議可決」(「佐野学予審問調書」『前掲書』二三九ページ)という方法をとっている。
- (9) この論説については、市川正一が「日本共産党公判闘争代表陳述」第一〇回でふれている。「……これは何も無産者新聞のそういう答へをした人が特別に間が抜けて居つたのではなしに、やはりこれは当時の党が尚ほ、共産党を斯くまで強く、あらゆる手段方法を以て共産党に入りたいということ、さうして……労働者の要求に応ずることの出来ない程まだ共産党の組織そのものが小さかつた、弱かつたということを唯反映して居るものに過ぎない……」。(『現代史資料・第一七巻社会主義運動4』三三四ページ)。
- (10) 関根悦郎「日本プロレタリア新聞発達史」(『総合ジャーナリズム講座』第七卷一七三ページ所収)。
- (11) 福本の新聞論を扱った論稿は、これまで香内三郎「長谷川「新聞」理論の一解釈」(『新聞学評論』第一〇号所収、一九六三年)だけである。香内は福本の史的唯物論の図式における「生活諸過程」カテゴリーの中には「制度、機構としてのマス・メディアが有機的に組みこめる余地は十分にあつた」とのべ、福本がそれを試みなかったことを理論の「縮小再生産」「跛行現象」とのべている。彼は、この時期を「マルクス主義のコミュニケーション理論の幅のせばまり」の時期とよんでいるが、私も賛成である。なお、この幅のせばまりの原因を、戦略・戦術上の問題と考えることはまちがっていると思う。それは香内も指摘するように、まさに史的唯物論の問題のだが、こ

れについては他日を期したい。

(12) 門屋博(一九〇一—)は二高を経て一九二六年東京帝大文学部社会学科卒、在学中は新人会および学生社会科学联合会会員。卒業後東京毎夕新聞に一年つとめる。同年日本共産党に入党。二七年無産者新聞専従になる。一九二八年四月逮捕され、翌年「解党派」になる。

戦時中は翼賛運動に協力、敗戦後は商社を経営。門屋については、思想の科学研究会編『転向』上巻一二二—一二四ページ参照。

(13) 佐藤毅「マス・コミュニケーション研究の基本的視角」『社会労働研究』第一四号一九六二年三月刊所収。

IV

門屋論文において、小稿のテーマである「無産階級の日刊新聞論争」は終りをつげた。その後、この「日刊紙」をめぐる論稿はいまのところ発見できない。

それは、この論争が、発端が早坂の「無産階級新聞」——それは今の言い方にすれば、進歩的商業紙ていどのニューアンスをもつものだろう——待望論であったのに、北条・門屋の反論が、前衛党機関紙論として展開されたからにはかならない。さらに、早坂の希望が夢にすぎず、現実には各党派別の新聞——無産者新聞、民衆新聞、労働農民新聞など——の発刊によって、議論の余地がなくなったからでもあろう。

だが、この論争がのちのジャーナリズム論にあたえた影響は大きい。とくに商業新聞の階級性暴露は、この論争によって始めて大衆化されたのであった。また進歩的ジャーナリズムのあり方をめぐる論争は、今日もまだ未解決のままである。たとえば、「大衆のもとするものを与える」という問題にしても、戦後の『社会新報』『新週刊』という経験も経た今日も、まだ充分に定式化されていると得えない。門屋論文が、ブルジョワ・ジャーナリズムとプロレタリア・ジャーナリズムという二分法を出発点としていることは記憶されている。門屋はこの二分法からプロレタリア・ジャーナリズム論を提唱し、そこから方法論としてのブルジョワ・ジャーナリズム論を批判したのである。「ブルジョワ」ジャーナリズムの影響を受けた

新聞観よりの徹底的な分離」という彼の主張は、ジャーナリズムだけでなく、ジャーナリズム論そのものへの別離を意味していた。このことは、早坂によってはじまった新聞批判の方法論をも否定するという結果を生む。門屋論文以後、共産党の側からのジャーナリズム論は姿を消す。ジャーナリズム論はむしろ社会民主主義者によってになわれることになるのである。門屋のジャーナリズム論の否定は、そのままの形で、三十年後の牧瀬恒二『新聞の論理』（一九六〇年刊）にひきつがれるのである。これにたいする反対論はよくきかれるが、対抗的なテーゼは、まともな形ではだされてはいない。

このように考えると、この四十年前の論争がはらんでいたさまざまな問題点は、今日にいたるも充分に解明されているとはいいがたいそこに、この論争を紹介する私の意図の一つがあったのであった。

(1) 牧瀬恒二『新聞の論理—ジャーナリズムの二つの顔』（一九六〇年刊）。ここでは、「ブルジョア・ジャーナリズムとプロレタリア・ジャーナリズム（マルクス・レーニン主義にたつジャーナリズム—山本）のほかに、第三の進歩的なジャーナリズムがあるとすれば（またそのような理解の仕方）、ブルジョア・ジャーナリズムをよるこぼせるだけだろう」と主張されている。また牧瀬はマスコミという言葉は「階級性を避けて通っているところに、実ははっきりした階級性がある」とのべている。この本は、門屋論文から三十数年間、日本の社会主義陣営のジャーナリズム論が一步もすすんでいないことを証明する記念碑的著作である。

〔附記〕

本稿にあつた時期の後でも、機関紙・誌論はさまざまな形で提出されている。第二無産者新聞・戦旗・プロレタリア科学などの刊行をめぐる書かねばならないことも多い。また、アメリカン・ジャーナリズムにたいする闘い、政治的自由の理解をめぐるでも、多くの論点がある。これらについては、なるべく早い機会に、本稿の続編として発表したい。

— Dec. 2, 1968 —